Sound Symbolism に関する一考察

——擬音語，擬態語の日英対照——

服部瑗子

A Study on Sound Symbolism

The Contrast between Japanese and English in Onomatopoeia and Mimesis Expressions

Mitsuko HATTORI

はじめに

日本語には「ゴーンと鐘が鳴った」とか「松虫がチンチロリンと鳴く」「木の葉がカサコソ音を立てる」のように声や音を言語で表わす擬声語，擬音語が多い．また，「すたすた歩く」「とっぷり日が暮れる」「ひらひら舞う蝶」「くりくりした目」「心がうきうきする」のように動作，状態，心理などを言語音で象徴的に表わす擬態語が数百以上ある．

欧米人のなかには，このような表現が多い言語を未発達な状態のものとする考え方もあるようだが，果してそうであろうか．擬音語，擬態語について日本語と英語を比較対照してみたい．

Sound Symbolism

言語には音声で対象物を模倣したり，象徴したりする音声象徴（sound symbolism）という現象がある．この現象は耳に聞こえる音を人間の音声で表現する直接模倣と，対象物から受ける感じを象徴音で表現する間接模倣とに分けることができる．前者を擬声，あるいは擬音，(onomatopoeia）といい，後者を擬態（mimesis）という．日本語と英語では造語，表現方法にかなりの相違点がある．まず，擬声語から比較してみよう．

Onomatopoeia

The Oxford English Dictionary には，つぎのように定義されている．

onomatopoeia＜Greek onomatopoiía（onoma＝name: poieîn＝make）

1 The formation of a name or word by an imitation of the sound associated with the thing or action designated; this principle as a force in the formation of words; echoism.

2 Rhet. The use of naturally suggestive words, sentences, and forms for rhetorical effect.

『広辞苑』には「擬声語」についてこう書かれている．

「擬声語」物の音響，音声などを真似て作った語（わんわん，ざあざあ，さらさらの類）

厳密に分類すれば，声を模した語が擬声語であり，音を模した語が擬音語である．

ところで，人間は自国語にある音，あるいはその組み合わせによって外界の音，声を言語化しようとする．したがって，同じ音，声を聞いても言語化されたものは異なる．まず，動物，

鳥，虫などの鳴き声の擬声語について日本語と英語の例をあげる．

・猿がキャッキャッと鳴く．Monkeys chatter.

・山羊がメーと鳴く．Goats bleat.／baa.

・犬がワンワン鳴く．Dogs bark.／bow-wow.／growl（グウウとうなる）howl（ウォーンと遠ぼえする）snarl（ウウーとうなる）whimper（クンクン鳴く）whine（クフーンクフーンと鳴く）woof（ウーとうなる）yap（キャンキャンほえる）yelp（ギャンギャンほえる）yip（キャンキャン鳴く）

・猫がニャオと鳴く．Cats mew.／meow（ニャーゴと鳴く）miaow（ニャオンと鳴く）cater-waul（ギャーギャー鳴く）purr（ゴロゴロのどをならす）

・馬がヒヒーンといななく．Horses neigh.／whinny（ヒンヒン鳴く）snort（ブフフンと鼻をならす）

・雌牛がモーと鳴く．Cows moo.

・雄牛がモオウと鳴く．Oxen low.

・豚がブーブー鳴く．Pigs grunt.／oink.

・ねずみがチューチュー鳴く．Rats squeak.

・蛙がケロケロ鳴く．Frogs croak.／boom（グーと鳴く）

・おんどりがコケコッコーと鳴く．Cocks crow.／go cock-a-doodle-doo.

・雀がチュンチュン鳴く．Sparrows chirrup.／chirp.

・あひるがガアガア鳴く．Ducks quack.

・蠅がブンブンいう．Flies buzz.

・こおろぎがリーリーリーと鳴く．Crickets chirp.／chirrup.

以上，一般的なものを列挙しただけでも，日英の擬声語の音声的ちがいがわかる．私たち日本人の耳には馬のいななきが [nei] と聞こえたり，おんどりの声が [kák-ə-dù:dul-dú:] と聞こえたりはしない．当然のことだが，日本語音声の枠組みのなかで「コケコッコー」とか「ヒヒーン」という擬声語は造られている．幼い頃から私たちはおんどりは「コケコッコー」馬は「ヒヒーン」と鳴くものだと教えられているので，それが頭のなかに定着し，ほかの言語音で聞きとることの妨げになっている．

では，文という形で表現する場合のちがいはどうであろうか

① 犬がクンクン鳴く．Dogs whimper.

② 猿がキャッキャッと鳴く．monkeys chatter.

③ 蛙がケロケロ鳴く．Frogs croak.

④ 雀がチュンチュン鳴く．Sparrows chirrup.（chirp）

⑤ こおろぎがリーリーリーと鳴く．Crickets chirrup.（chirp）

上記が例の示すように①の場合，日本文の述部は擬声語（クンクン）＋動詞（鳴く）という形で構成されている．一方，英文では whimper という動詞が（クンクン鳴く）という擬声動詞として述部になっている．②の例文でも，擬声語（キャッキャッ）と動詞（鳴く）が英語動詞（chatter）に対応する．③④⑤の文でも同様の構成である．もちろん，英語の擬声語が名詞的に使われることもあるが，動詞として述部を構成することが多い．日本語の擬声語は動詞を修飾する副詞としての役割が主であり，単独で述部となることはない．（省略形の文は例外）この点が日本語と英語のもっとも大きな相違である．また，日本語の場合，動物，鳥，虫など人間以外の殆どすべてに対して「鳴く」という同一動詞を使うことができる．個別の特殊性を

表わすのに専ら擬声語の副詞的働きに依る日本語に対し，英語は擬声動詞の働きによって個別の特殊性を表現している．その意味では英語は動詞への依存度が高いといえよう．

生物の鳴き声以外の外界の音に対する擬音表現でも同様の例をあげることができる．

①バタンと落ちる bump　②ドサッと落ちる dump　③ドスンと落ちる slump
④ストンと落ちる plump　⑤ドスッと落ちる thud　⑥ガチャンと落ちる crash

日本語では同じ動詞の「落ちる」に異なった擬音語を前置して特殊性を出しているが，英語は異なる動詞で擬音の相違を表現する．

宮沢賢治の『注文の多い料理店』という作品から一文を抜き出し，John Bester の英訳文と比較してみよう．

風がどうと吹いてきて，草はざわざわ，木の葉はかさかさ，木はごとんごとんと鳴りました．（下線筆者）

A sudden gust of wind sprang up; the grass stirred, the leaves rustled, and the trees creaked and groaned.（下線筆者）

「どうと吹く」「ざわざわ」については，音を伴った擬態表現として後で触れることにするが，「かさかさ」「ごとんごとん」の擬音語に対して 'rustled' 'creaked and groaned' という擬音動詞を使っている点に注目したい．

・井伏鱒二の作品『黒い雨』John Bester 英訳の中に，こんな表現がある．

瓦を踏むとばりばり割れる．（下線筆者）

The tiles crunched under our feet.（下線筆者）

・谷崎潤一郎『細雪』を翻訳した E. G. Seidensticker の英文と原作の文を比べてみる．

珈琲茶碗やビールのコップやワイングラスや葡萄酒やウイスキーの壜がパチャンパチャンと破裂する．（下線筆者）

Coffee cups and beer steins and wine glasses and wine and whisky bottles would be snapping and cracking.（下線筆者）

この英文でも擬音動詞が–ing 形で使われている．動詞化している擬音語の例文はいくつでも挙げることができる．

・星新一の『きまぐれロボット』・Robert Matthew の英訳文

青年の持っていた受信装置がガーガーと音を立てはじめた．（下線筆者）

The receiver in the young man's hand began to buzz.

・井上靖『敦煌』・Jean Oda Moy 英訳

夕刻になると沙漠の強風に煽られて旗はばたばたと鳴った．（下線筆者）

Toward evening, the banner flapped noisily as the strong winds rose.（下線筆者）

・川端康成『雪国』・Edward G. Seidensticker 英訳

自動車で十分足らずの停車場の燈火は寒さのためぴいんぴいんと音を立ててこわれそうにまたたいていた．（下線筆者）

The light in the railway station, not ten minutes away by taxi, flicked on and off as if crackling in the cold.（下線筆者）

・村上春樹『風の歌を聴け』・Alfred Birnbaum 英訳

山羊（私注・ニックネーム）はいつも重い金時計を首から下げて，ふうふう言いながら歩き回ったんだ．（下線筆者）〈厳密にいえば擬態的要素も入っている〉

Billy Goat always wore a heavy gold watch around his neck, and he huffed and puffed just

walking around.（下線筆者）

・黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』・Dorothy Britton 英訳

ふり返らずにランドセルをカタカタいわせて走り出した.（下線筆者）

She ran off, without a backward glance, her bag flapping against her back.（下線筆者）

また，英語は名詞に対する依存度も高い言語であるから，擬音語を名詞として使う例も多い.

・井伏鱒二『黒い雨』の中の一文

僕としてはドカンという音がしたとは言いかねる．ドワァッという音であった.（下線筆者）

Personally, I should not have described it as a bang, but definitely as a roar.（下線筆者）

この場合は名詞形で英訳することで，原文に近い効果を出しているように思われる.

・宮沢賢治の『注文の多い料理店』の英訳文にも名詞形で使われている擬声語が見出される.

扉はがたりと開き，犬どもは吸いこまれるように飛んで行きました．その扉のむこうのまっくらやみのなかで，「にゃあお，くぁあ，ごろごろ」という声がして，それからがさがさ鳴りました.（下線筆者）

The door banged open, and the dog vanished inside as though swallowed up. From the pitch darkness beyond came a great miawing and spitting and growling, then a rustling sound.（下線筆者）

'miawing and spitting and growling' は動詞を名詞化した擬声語群である.

つぎに，擬態語について日英の比較対照をしてみよう.

Mimesis

英語では，いわゆる擬態語を mimesis という.

The Oxford English Dictionary によれば，

Mimesis＜Greek mimētik (ós): imitation

（Rhet.）A figure of speech whereby the words or actions of another are imitated.

擬態語相当語と思われる英語の加重語，重複語を「研究社新英和大辞典」などからピックアップしてみる.（擬態的私訳）

・argle-bargle（あうだ，こうだと言い争う）動詞
・arsy-varsy（あべこべに・あべこべの）副詞・形容詞
・topsy-turvy（同上）
・boo-boo（とんちんかん）名詞
・Crisscross（ちぐはぐ・ちぐはぐに）名詞・副詞（交差する－動詞）
・dillydally（ぐずぐずする）動詞
・dingle-dangle（ぶらぶらと・ぶらぶらしている）副詞・形容詞
・drip-drip（ポタポタ，雨だれの様子）名詞
・fiddle-faddle（ばかばかしさ・ばかばかしい）名詞・形容詞（から騒ぎする－動詞）
・flimflam（でたらめ）名詞（ペテンにかける－動詞）
・helter-skelter（あたふた・あたふたと・あたふたした）名詞・副詞・形容詞
・higgledy-piggledy（めちゃくちゃに・めちゃくちゃな）副詞・形容詞
・hoity-toity（いやはや・あきれた）間投詞・形容詞
・highty-tighty（つんと気どった）形容詞

・humdrum（平々凡々・平々凡々な）名詞・形容詞
・hurly-burly（ごたごた・ごたごたの）名詞・形容詞
・humpty-dumpty（ずんぐりむっくりした）形容詞
・roly-poly（同上）
・jimjams（びくびく）名詞
・mingle-mangle（ごたまぜ）名詞
・mishmash（同上）
・niddle-noddle（こっくりこっくりしている・こっくりこっくりする）形容詞・動詞
・pell-mell（てんやわんや・ごちゃごちゃの・ごちゃごちゃに）名詞・形容詞・副詞（ごちゃまぜにする－動詞）
・razzle dazzle（わいわいガヤガヤ）名詞
・ribble-rabble（わいわい連）名詞
・rowdydowdy（がやがやした）形容詞
・shilly-shally（ぐずぐず，のらりくらり・ぐずぐずした・ぐずぐずして）名詞・形容詞・副詞（くずぐずする－動詞）
・skimble-skamble（めちゃくちゃの）形容詞
・slipslop（しゃびしゃび・ばかばかしい）名詞・形容詞（ぶかぶかの上靴をはいてバタバタ歩きまわる－動詞）
・whim-wham（そわそわ，いらいら）名詞
・wigwag（あちこち動く）動詞
・wisky-wasky（女々しい）形容詞
・zigzag（ジグザク・ジグザグの・ジグザグに・ジグザグに動く）名詞・形容詞・副詞・動詞

日本語の擬態語については『広辞苑』につぎのように説明されている．

「擬態語」事物の姿態を感覚的に写す語（にやにや，ざらざら，ゆったりの類）

別の言いかたで定義つけることもできる．即ち，擬態語とは，生物，無生物，自然などの音とは直接関係のない状態，有様を描写的，象徴的に表わす語である．「じろじろ見る」「すらりと背が高い」「しこしこしておいしい」「どんよりした空」など，浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』には純然たる擬態語が四百以上も載せられている．この辞典では，いわゆる擬態語を態を写す擬態語と，人の情を写す擬情語に分けているが，「びしっと枝が折れる」のように音の要素と態の要素を同時に表わす語や，「ほっと胸をなでおろした」のように態と情の要素を兼ねた語も多い．それらのすべてを加えると，約七百語が収録されている．擬音語に比べてはるかに多い語彙である．日本語の擬態語に人の様子や動作，態度，心情などを描写したものが多いことも，一つの特徴である．タテ型構造の日本の社会では他人との付き合いに心をくだく．人の様子や態度，動向，心理状態などに気を配るから必然的にそれらを描写する擬態語は多種である．「つんつんしていると嫌われる」「つべこべ言わないで，課長の命令どおりにしたほうが得だ」「育ちがいいからおっとりしている」「あの人に会うときは，きちっとした服装で行きなさい」「きょろきょろ見まわすのはみっともない」など，例を挙げたら切りがない．私たちは殊更，意識せずに使っているけれど，日常の会話の中でも擬態語は多い．

「さっさと仕事，片づけて早めに帰ろうかな」

「だめよ．課長さん，こっちのほう，じっと見てるわよ」

「びくびくすることないよ」

「あなたったら，いつもはらはらさせる人ね」

あまり上品な例ではないかもしれないが，この会話から擬態語を取り去ると，その場での人間性が感じられなくなってしまう．文を書く場合でも，擬態語を使うことによって，その場の状況，心情などをヴィヴィッドに描写することができる．日本語にとって擬態語は欠かすことができない重要なエレメントである．

日本語では擬態語は「びくびくする」のように「する」という動詞と結びつくこともあるが，殆どはそのままの形か，「と」を伴った形で副詞として動詞を修飾することが多い．

一方，英語の場合は，動詞化しているものがかなりある．このことは擬音語と同様である．

例えば，「笑う」という領域の日英語を比較してみよう．（擬声と擬態を兼ねた語も含む）

beam（にっと微笑む）chortle（ハッハッハと声高らかに笑う）chuckle（クックッと笑う）giggle（イヒヒと笑う）grin（にやにや笑う）guffaw（ゲラゲラ笑う）howl（ワッハッハと大笑いする）laugh（ハハハと笑う）roar（ワァーと，どよめくように大笑いする）simper（オホホと笑う）smile（にこにこ微笑む）smirk（オホホとすまして笑う）snicker（クスクス笑う）snigger（にたにた笑う）

英語の擬態動詞（擬声要素を合わせ持つ語も含める）は実に豊富である．

「泣く」の領域についてはどうであろうか

bawl（ワーンワーンわめくように泣く）blubber（オイオイしゃくり上げて泣く）cry（ワーワー声を上げて泣く）mewl（オギャーと泣く）pule（ヒーヒー泣く）screech（キーキー泣く）sniffle（鼻をすすってクスンクスン泣く）sob（シクシクすすり泣く）wail（ワーワー大声で泣き悲しむ）weep（メソメソ涙を流す）whimper（シクシク泣く）

「歩く」の領域でも，英語の擬態動詞は多い．

bustle, dodder, hike, loiter, lumber, pace, pad, plod, shamble, shuffle, step, stramp, stomp, stride, stroll, stagger, swagger, toddle, totter, tread, trot, trudge, waddle, walk ... etc.

これに対し，日本語は下記のような擬態語を「歩く」という動詞の前に置くことによって，それぞれの歩行の特殊性を表現する．〈例〉すたすた歩く

すたすた，せかせか，そろそろ，そろりそろり，だらだら，ちょこちょこ，てくてく，でれでれ，とことこ，どさどさ，どしんどしん，どすどす，どたどた，とぼとぼ，のっしのっし，のそのそ，のろのろ，ばたばた，ぱたぱた，ひょこひょこ，ひょろひょろ，ふらふら，ぶらぶら，よたよた，よちよち，よろよろ，ゆっさゆっさ，ゆらゆら，ゆらりゆらり

歩きかたの微妙な違いを描写するためには，これらの擬態語はなくてはならない．

以上，「笑う」「泣く」「歩く」の領域の日英言語表現について検討してきたが，英語は擬態動詞がかなり多いということができる．しかし，〔擬態語＋動詞〕という形で表現する日本語の場合，擬態語は語尾変化もせず，そのままの形で動詞と結びつくことができるため，簡単に造語できるという利点がある．描写する対象の状態に応じ，様々な擬態語を使い分けることにより，日本語は微妙なニュアンスまで表現できる言語形態を持っているといえる．

いくつかの例を挙げ，対応する英語表現を，動詞，名詞，形容詞，副詞別に検討してみよう．

〔動詞を使った表現〕

・星新一『きまぐれロボット』・Robert Matthew 英訳（以下例文の下線筆者）

その老人は夜の道をとぼとぼ歩いて町はずれの自分の家に帰ってきた．

The old man trudged home along the suburban road late at night.

・芥川龍之介『羅生門』・Glenn W. Shaw 英訳

両手をわなわなふるわせて，肩で息を切りながら……

Her hands trembling, her shoulders heaving as she gasped for breath...

・開高健『夏の闇』・Cecilia Segawa Seigle 英訳

「そう思うと，ゾッとするわね」

"...and I am appalled."

・宮沢賢治『注文の多い料理店』・John Bester 英訳

ブラシを板の上に置くやいなや，そいつがぼうっとかすんでなくなって……

But no sooner had they put the brush back on its shelf than it blurred and disappeared...

・谷崎潤一郎『細雪』・Edward G. Seidensticker 英訳

妙子は病院を捜し当てるまでに好い加減汗びっしょりになった.

Taeko was dripping with perspiration by the time she managed to find the hospital.

・太宰治『斜陽』・Donald Keene 英訳

そのひとにだけは，びしびし叱られた.

Mrs Nishiyama's young wife was the only one who rebuked me.

・村上春樹『風の歌を聴け』・Alfred Birnbaum 英訳

「家族はクタクタになって空中分解．よくある話よ，そうでしょ？」

"The family was so worn out by it all. There was nothing to hold us together. Typical story, don't you think?"

「がっくりだよ．参ったね」

"I'm all broken up."

倉庫のひとつひとつはかなり古びていて，煉瓦と煉瓦の間には深い緑色の滑らかな苔がしっかりと貼りついている.

Each warehouse we passed was old and weathered, a smooth layer of deep green moss clinging between the bricks.

・三島由紀夫『宴のあと』・Donald Keene 英訳

若い人たちはこの最初の演説にがっかりし……

Noguchi's first speech had disappointed his young supporters.

以上の例文は日本語の擬態表現を動詞を主体に英訳した例である．「ぞっとする」「がっかりする」などの擬情語が英語においては，そういった感情を起こさせる原因を主語にした能動態の形，あるいは，感情の受け手を主語にした受動態の形で表現されている.

日本語の擬態語はこのように英語動詞による表現と対応するほか，名詞，形容詞，副詞を主体とした表現にも対応する．(例文の下線筆者)

〔名詞を使った表現〕

・芥川龍之介『蜘蛛の糸』・Dorothy Britton 英訳

ある日のことでございます．おしゃか様は極楽のはす池のふちをひとりでぶらぶらお歩きになっていらっしゃいました.

One day, the Lord Buddha was taking a stroll beside the Lotus Pool in Paradise.

・川端康成『雪国』・Edward G. Seidensticker 英訳

……ごくごく水を飲んだ.

She poured herself a glass of water and drank in great gulps.

・星新一『きまぐれロボット』・Robert Matthew 英訳

エム博士は地下室から出てきてほっとため息をついた.

The doctor came out of the cellar and breathed a sigh of relief.

・黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』・Dorothy Britton 英訳

白い木綿のパンツまでビリビリになっている.

Even white cotton panties were sometimes in shreds.

〔形容詞を使った表現〕

・開高健『夏の闇』・Cecilia Segawa Seigle 英訳

シャツとズボンをぬいでじとじと湿った壁の古釘にかけたあと……

After I took off my shirt and trousers and hung them on an old nail on the damp, tacky wall...

・星新一『きまぐれロボット』・Robert Matthew 英訳

男がエサをやっていると，ねずみたちがそわそわしはじめた.

As he was feeding them, the rats became restless.

・黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』・Dorothy Britton 英訳

肩や腕ががっちりしていてヨレヨレの黒の三つ揃いをキチンと着ていた.

He had solid shoulders and arms and neatly dressed in a rather shabby black three-piece suit.

〔副詞を使った表現〕

・川端康成『雪国』・Edward G. Seidensticker 英訳

したたか酔っているのに駒子は険しい坂をしゃんしゃん歩いた.

Drunk though she was, she walked briskly down the steel hill.

・太宰治『斜陽』・Donald Keene 英訳

花びらのような大きい牡丹雪がふわりふわり降りはじめていたのだ.

Snowflakes big as petals have softly begun to fall.

・竹山道雄『ビルマの竪琴』・Howard Hibbet 英訳

隊長は苦しそうに黙っていましたが，やがてぽつりぽつり答えました.

For a moment there was a painful silence. Then the captain answered hesitantly.

日本語の擬態語表現に相当する英語表現を小説の英訳を例として挙げてみたが，当然のことながら，翻訳者の資質によってその表現法は多様である．しかし，日本語の擬態語の微妙なニュアンスを異なる言語に移しかえることは至難のわざである．言語にはそれぞれの言語国民が音声から受ける独持の語感があるからだ．その語感について次の項で触れてみたい.

Linguistic Sense

英語国民の音声による語感から書きはじめることにする．"*Language*" の著者 Leonard Bloomfield の説では，'sn–' という子音は「早い分離や動き」を表現する語の語頭によくあるという．snap（ポキッと折れる）snatch（サッとひったくる）snip（チョキンと切る）など．また "*The English Language*" の著者 Logan Pearsall Smith も同じようなことに言及している．その中から擬態語に相当するものを抜き出して書いてみよう．'fl–' という子音は「無格好な動作」を表わす語頭にある．flop（バッタリ倒れる）flounder（ジタバタあがく）．また 'fl–' は「早い動作」を象徴するともいわれる．flutter（パタパタ羽ばたく）flap（パタパタ動かす）

flush（パッと赤らむ，ドッと流れる）flicker（ヒラヒラ飛ぶ，チカチカ輝く）．'scr–' は「金高い声」を表わす語頭．scream（キャッと叫ぶ）金切り声を表わす語はそのほか screek, screech, scrike などある．また，'scr–' は「摩擦」も示す．scrub（ゴシゴシこする）scrape（ゴシゴシこする）screw（ギュッとねじで締める）．'squ–' は「圧力をかけた摩擦」を表わす．squeak（キーキーきしる）squeeze（ギュッとしぼる）squash（ギューギュー詰め込む）．'gl–' は「光に関係」がある語頭．glitter（ピカピカ光る）glimmer（チラチラ光る）gleam（キラッと光る）glisten（キラキラ光る）．'gr–' は「不満」を表わす．grumble（ブツブツ不平を言う）grunt（ブーブー不平を言う）groan（不満でウーとうなる）．語尾にも象徴的な音声結合があるという．'–er' で終る動詞は「くりかえしの動作」flutter（パタパタ羽ばたく）flicker（チカチカ輝く）quiver（ブルブル震える）shiver（ブルブル震える）waver（ユラユラ揺れる）．'–ump' は「無格好な動き」bump（バタンと落とす）dump（ドシンと落とす）thump（ゴツンと打つ）'–ash'「激しい急な動作」を表わす語に多い．flash（パッと光る）crash（ガチャンと倒れる，落ちる，ぶつかる）clash（ガチャンと衝突する）splash（パチャッとはね散る）など多数ある．また，英国の Henry Bradley はその著書 "*The Making of English*" で，英国人が音声に対して抱いている語感について書いているが，主な点を要約すると，

1　長母音はゆっくり発音するから，ゆっくりした動きを暗示する．
2　同じ子音の反復は動作の反復を暗示する．長母音を伴っているときは，ゆっくりした反復動作，短母音を伴うときは速い反復動作を示す．
3　'ee' とか'i' のような母音は「小さい」とか「軽い」とかいう概念を伝達する．
4　'oo' のような母音は大きなものを暗示する．
5　短母音のあと [p, t, k] のような無声破裂音で終る語は急な不意の動作を表現する．
6　耳ざわりな子音や発音しにくい子音がつづくものは，不快で，あらあらしい動きを表現する語にふさわしい．

以上のような語感が英語を母国語とする人によって提示されている．

では，日本人が日本語の音声に対して感じる語感はどうであろうか．

金田一春彦が「日本語の特質」の中で音声による語感について触れている部分を要約する．

1　カ行は乾いた感じ，かたい感じ（カサカサ，カラカラ，キチッと）
2　サ行はさわやかな感じ，湿った感じ（サラサラ，シトシト）
3　ナ行はなめらかな感じ，ねばっこい感じ（ヌルヌル，ネバネバ）
4　ハ行は軽い感じ（ヒラヒラ，フワフワ）

また，母音については

1　アは大きいもの，荒いもの（ザアッと，ガバッと）
2　イは小さい感じ（チビッと，チンマリ）
3　エは品のない感じ，マイナスのイメージ（ヘナヘナ，セカセカ）

そのほか，清音と濁音では語感がちがうという．清音は小さく，きれいで速い感じ．濁音は大きく荒く遅い感じ（コロコロとゴロゴロ・キラキラとギラギラ）

私たち日本人なら上記の指摘にうなづくことができよう．日本語の擬態語がいかに繊細な感覚で造語されるかを解くくだりは特に興味深く思われるので引用させてもらう．

「日本語の擬態語というのは実にこまかい配慮のもとにつくられておりまして，たとえば同じころがることの形容でもいろいろな言い方があります．「コロコロ」—これはころがり続けること．「コロリ」——回ころがって止まる様子．「コロッ」—ころがりかけるさま．「コロリ

コロリ」—ころがっては止まり，ころがっては止まるさま．「コロンコロン」—はずみをつけてころがって行くさま．「コロリンコ」——回ころがって止まり，あとは動きそうもない．……後略」

日本語の擬態語は実に感覚的であり，描写性に富んでいる．英語に比して語彙も豊かだ．それは日本語の構文と深い関わりがある．日英語の特徴が浮き彫りになっていると思われる例として，川端康成の『雪国』と Seidensticker の英訳文を対比し，この稿のまとめとしたい．

『雪国』の冒頭の部分を引き，日英語の発想，構造を比較してみよう．（下線，記号筆者）

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった．夜の底が白くなった．信号所に汽車が止まった．（中略）鉄道の官舎らしいバラックが山すそに寒々と散らばっているだけで，雪の色はそこまで行かぬうちに闇に飲まれていた．

The train (S) came (V) out of the tunnel into the snow country. The earth (S) lay (V) white under the night sky. The train (S) pulled up (V) at a signal stop. ...Low, burracklike buildings (S) that might have been railway dormitories (S) were scattered (V) here and there the **frozen** slope of the mountain. The white of the snow fell away into the darkness some distance before it reached them.

英訳では各文が主語（S）とそれについて陳述する動詞（V）から成り立っている．まず，動作主 train があり，つぎにその動作 came が示され，そのあと付加的なものが補足されるという論理的な構文である．一方，日本文は冒頭から主語のない文で始まっている．「国境の長いトンネルを抜ける」主体は何なのか，構文的には示されていない．ここでは，長いトンネルの黒の世界から真っ白い雪の世界へと鮮やかに変わった景色にポイントが置かれていて動作主は問題ではない．主観的な構文である．「夜の底が白くなった」という感覚的な描写文に対する英文は The earth (S) lay (V) white under the night sky (M). という論理的な構文である．「鉄道の官舎らしいバラックが山すそに寒々と散らばっている……」を英訳文と対比すると，日英語の構文，発想の違いがはっきりとわかる．日本文は「バラックが寒々と散らばっている……」と能動態で書かれているが，英文では無意志物である建物は were scattered という受動態で陳述されている．「寒々と」という表現は，風景とそれを見る人間の心情が混然一体化した擬態的表現であり，英文の "the frozen slope"（凍りついた斜面）という即物的表現とは著しく異なる．つまり，この場合，事物を客観的にとらえる発想，論理的な構文を軸とした英文に対して，日本文は主観的な直観描写を軸とした発想構文なのである．

以上，この稿では様々な例文を挙げてきたが，これらの日英文が主として文学作品に偏っていることに反論があるかもしれない．しかし，逆に言えば，このことが日本語の擬音，擬態語の特性を表わしていると思う．論理を主体として展開する文には擬音，擬態語は不向きである．客観的な論理を主軸にした文でこれらを使いすぎると論旨の客観性が弱められる．

言語にはその言語国民の感じ方，考え方が反映されている．古来から論理よりも情を重んじ，情緒的，描写的発想を好む日本人の言語表現において，感覚的で描写性に富んだ擬音，擬態語は重要なエレメントである．日常の会話や文学作品，殊に事物や心情の鮮明な描写に心を遣う創作家の詩や文表現から，擬音，擬態語を取り去ることはできない．言ってみれば，日本語の情的本質と深い関わりを持っているのである．

参 考 文 献

1）Murray, J. A. (ed.): *The Oxford English Dictionary*（1933）

2）新村出編：広辞苑，岩波書店（1983）

3）小稲義男編：新英和大辞典，研究社（1983）
4）尾野秀一編：日英擬音・擬態語活用辞典，北星堂書店（1984）
5）藤田孝，秋保慎一編：擬音語，擬態語翻訳辞典，金星堂（1984）
6）三戸雄一，筧寿雄編：日英対照擬声語（オノマトペ）辞典，学書房出版（1984）
7）浅野鶴子編：擬音語・擬態語辞典，角川書店（1985）
8）金田一春彦：日本語の特質，日本放送協会（1986）
9）中島文雄：日本語の構造，岩波書店（1987）
10）国廣哲彌編：日英語比較講座4，発想と表現，大修館（1986）
11）楳垣　実：日英比較語学，大修館（1985）
12）上野景福：英語語彙の研究，研究社（1986）
13）井伏鱒二：黒い雨，新潮社（1987）
14）Bester, John: *Black Rain*, Kodansha International（1986）
15）井上靖：敦煌，新潮社（1985）
16）Moy Oda, Jean: *Tun-huang*, Kodansha International（1978）
17）川端康成：雪国，岩波書店（1987）
18）Seidensticker, E. G.: *Snow Country*, Charles E. Tuttle（1986）
19）芥川龍之介：蜘蛛の糸，羅生門，岩波書店（1981）
20）Britton, Dorothy: *The Spider's Thread*, Kodansha International（1987）
21）太宰治：斜陽，新潮社（1986）
22）Keene, Donald: *The Setting Sun*, Charles E. Tuttle（1981）
23）谷崎潤一郎：細雪，新潮社（1986）
24）Seidensticker, E. G.: *The Makioka's Sisters*, Charles E. Tuttle（1981）
25）竹山道雄：ビルマの竪琴，新潮社（1980）
26）Hibbet, Howard: *Harp of Burma*, Charles E. Tuttle（1975）
27）開高健：夏の闇，新潮社（1985）
28）Seigle Segawa, Cecilia: *Darkness in Summer*, Charles E. Tuttle（1974）
29）村上春樹：風の歌を聴け，講談社（1987）
30）Birnbaum, Alfred: *Hear the Wind Song*, Kodansha International（1987）
31）星新一：きまぐれロボット，角川書店（1985）
32）Matthew, Robert: *The capricious Robot*, Kodansha International（1986）
33）宮沢賢治：注文の多い料理店，ポプラ社（1986）
34）Bester, John: *Wild Cats and the Acorns, and other stories*, Kodansha International（1985）
35）黒柳徹子：窓ぎわのトットちゃん，講談社（1985）
36）Britton, Dorothy: *Totto-chan*, Kodansha International（1987）